

平成31年7月25日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880127

氏名 中野 悠希

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先: 都市名 モスクワ (国名 ロシア連邦)
2. 研究課題名 (和文) : 東西スラヴ諸語における前置詞句 u+生格の意味の対照研究
3. 派遣期間: 平成 30年 9月 1日 ~ 平成 31年 7月 1日 (304日間)
4. 受入機関名・部局名: モスクワ大学文学部スラヴ文献学講座
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

スラヴ諸語に共通の前置詞 u は「~のもとで」という意味を持ち、名詞の生格 (= 属格) を要求して前置詞句 u+生格を成す。前置詞句 u+生格は概して場所を表す修飾語として用いられるが、言語によっては所有者を表すのに用いられることもあり、この用法は特に東スラヴ語群で発達している。一方で地理的に東スラヴ語と連続体を成す西スラヴ語群では所有者を表す前置詞句 u+生格の使用は比較的稀で、従来十分な記述がなされていない。派遣先での研究の目的は、東スラヴ語群と西スラヴ語群における所有者標識としての前置詞 u の使用条件を比較し、その共通点、相違点を明らかにすることである。具体的には以下の2点に取り組んだ。

1. ロシア語とウクライナ語 (以上東スラヴ語群)、ポーランド語とチェコ語 (以上西スラヴ語群) の4言語すべてで出版されている文学作品を収集し、所有者標識の前置詞 u の使用状況を比較した。また、派遣前の予備調査で、特にポーランド語においては身体部位の所有者 (人間・動物) を標示するのに所有者標識の前置詞 u が用いられやすいことが明らかとなっていた。このため、ポーランド語で著された生物図鑑を複数入手し、所有者標識の前置詞 u の用いられ方を観察した。

2. ロシア語においては、前置詞 u で標示された所有者の項が、統語上は修飾語であるにもかかわらず、意味的・機能的に主語に相当する特徴を見せることがある。その一つが再帰所有代名詞との照応であるが、事前の調査で、この現象の発現には世代差が見られ、特に若年層で前置詞句 u+生格と再起所有代名詞との照応を容認する傾向が見られることが示唆されていた。これを裏付けるため、モスクワ大学文学部の学生20人余りを対象にアンケート調査を行った。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムで得られた研究成果の一部として、ポーランド語における所有者標識の前置詞 *u* の使用条件についてまとめた論文をロシア語で執筆し、今年7月に日本国内の学術誌に投稿した。ロシア語における前置詞句 *u*+生格と再帰所有代名詞との照応現象に関して行ったアンケート調査の結果については、考察がまとまり次第学会等で発表する予定である。

今回の派遣では西スラヴ語群に属するポーランド語に焦点を置いて調査を行ったが、これは東スラヴ語群との境界に位置するこの言語において、所有者標識の前置詞 *u* の使用状況に東スラヴ語群との連続性が見られるか否かを調べるためである。結果として、ポーランド語においては所有者標識の前置詞 *u* を用いて身体特徴を表す構文の生産性が高いこと、またこの構文は動詞「持つ」を用いて身体特徴を表す構文と意味的に重なり合うことが明らかとなった。今後はウクライナ語(東スラヴ語)とチェコ語(西スラヴ語)における所有者標識の前置詞 *u* の使用状況について、今回収集した言語資料やコーパス等を基に調査を進めていく。

ウクライナ語の所有者標識の前置詞 *u* に関しては、従来ロシア語との比較で論じられることが多く、しかも文体論的な問題として扱われていることがほとんどである。ウクライナ語で身体特徴を表す構文において前置詞 *u* と動詞「持つ」のふるまいにポーランド語と同様の傾向が見られるかを調べることで、新たな角度からウクライナ語の前置詞 *u* の特徴を捉えられる可能性がある。チェコ語についても同様の調査を行い、東西スラヴ諸語において所有者標識の前置詞 *u* の用法に共通の特徴が見出せるか否かを検証する。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

何よりも重要なのは、ロシア語学及びスラヴ語学の本場で研究指導を受けられたことである。モスクワ大学文学部スラヴ文献学講座の主任でポーランド語史・方言学が専門のナタリヤ・アナニエヴァ教授の講義を聴講し、またポーランド語の前置詞 *u* に関する論文の執筆に当たって同教授に助言を請えたことは非常に貴重な経験となった。その他、言語学のゼミナールに参加してロシア語の前置詞 *u* に関する研究報告を行い、講師と学生、院生から母語話者としての意見を聞くことができたのも有益であった。

文献収集の点でも成果があった。5つの文学作品の各国版を含め、日本では手に入りづらい文献を合わせて40冊以上収集することができ、当面の言語資料が確保できた。特にポーランド語文献の入手は研究を大きく前進させるもので、現地滞在中に上記の論文を完成させることができた。本プログラムの助成なしには実現できなかったことである。

また、授業への参加を通してロシア語のアカデミックライティングの訓練を受けられたり、ポーランド語・ウクライナ語研究者との人脈を築けたりしたことや、各国からの留学生と研究に関して意見交換ができたことも大きな収穫であった。ロシア語だけでなく、ポーランド語やわずかながらウクライナ語でコミュニケーションを取る機会にも恵まれ、研究遂行に欠かせない諸言語の運用能力を実践的に鍛えることができた。